

Title	E・H・カー著 『新しい世界』
Sub Title	Edward Hallett Carr : The new society
Author	内山, 正熊(Uchiyama, Masakuma)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1953
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.26, No.4 (1953. 4) ,p.75- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19530415-0075">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19530415-0075</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Edward Hallett Carr:

## The New Society. 1951.

Publisher: London, Macmillan.

E・H・カー著『新ソソ世界』

E・H・カー教授が、A・J・トインビー教授と共に世界的な文明批評家であり、また現代英國に於ける政治哲學乃至歴史哲學界の

紹介と批評

第一人者であつて、且つ國際問題の權威者であることは今ここに喋々を要しないであらう。終戦後早々に我國に於いても、彼の名著「Conditions of Peace,」1942「平和の條件」が譯出されて以來、その近著は「The Soviet Impact on the Western World,」1946「西歐を衝へん連」を始めとして、「The Twenty Years' Crisis,」1919—1939, second edition, 1946「危機の二十年」,「Nationalism and After」1945「ナショナリズムの發展」と相次いで邦譯され、我が國に於いてもカー教授の名は著しく高まるに至つた。彼はケンブリッジ大學を出てから四十四歳まで英國外務省の實務に携わり、特にソヴェエツトに對する西歐の外交前衛基地であつたラトヴィアのリガにも在勤したキャリア・ディプロマツトであつて、それ故に彼の國際問題分析はすでに定評あるところであるが、更に彼のスラヴ文明に對する研究が「ドストエフスキー論」、「バクレーニン」を始めとして貴重な業績を生んでゐるのもこれによるといえるのである。彼が國際問題研究の權威者として今や不動の地位を占めるに至つたのは、この現實的體験と共にその深い思想的背景をもつて現代世界の根本問題に解剖分析のメスを進めるからにほかならない。一九四二年戰爭中に出された「平和の條件」が戦後世界の社會構造を洞察した名著として極めて高く評價されたが、これを裏付ける彼の國際關係研究の基礎理論は「危機の二十年」に表明されている。この表題に示される如く、彼は現代世界の危機を十九世紀的秩序を可能ならしめていた諸條件の全面的崩壞にあるとして、従來の世界構造、國際秩序の根柢に鋭い分析を加へるのである。この彼の危機意識がその著書をしてつねに獨特の魅力を放たし

め、その論説が歐米のみならず我國にまで著しく迎えられる所以である。

この危機意識は彼の近著すべてを貫く基調をなして居り、殊に二つの世界の対決の問題は殆んどその主題を占めるものといつてよい。彼が西歐社會の立場に立ちながら常に冷静に西歐社會自體に客觀的分析反省を怠らず、ソヴェット社會の世界的意義を觀取検討しつつ、二つの世界の基本的對立とその超克に眞剣な考察を進めている點は、特に我々の注目を惹くところである。而も西歐の没落或は世界指導權の米ソに移つた事態を意識し、徒らにかつてのヨーロッパ華かなりし過去の姿を回顧するノスタルジアに動かされることなくして新しい時代を如何に迎えるべきかを、ただに思想的のみならず政治的、經濟的、社會的の現實的問題を通じて建設的に探求する態度は、右に左に動搖常なき我國の思潮に對し特に反省を促すものといわねばならない。日本が弱體な經濟的基礎の上に立ちながら西歐デモクラシーの線に沿つて再建の道を進もうとする以上、このカー教授の中正な社會主義的再建理論は我國の進路に對しても貴重な示唆を與えるものであると思われる。

この意味に於いて、今ここに簡単に紹介する「新しい世界」は、現代世界の危機を檢討してこれに對處する問題をとりに上げたものとして注目すべきものであるが、それはB・B・C企畫による六回にわたる講演をまとめたものだけに、特に身近かにアッピールする魅力をもっている。而も本書の特色は、この強い危機意識が歴史哲學的な精緻な思想的分析の上にとり上げられ、單に一般の興味のある國際外交問題だけでなく、彼の歴史觀、世界觀が活き活きと提示さ

れている點にある。殊に第一章歴史ヒストリカル的接近は、西歐文明の危機をテーマとして、トインビーの所論を彷彿せしめる雄渾な迫力をもつてその斯んな歴史觀を展開している。第二章「經濟競争から計畫經濟へ」、第三章「經濟的壓迫から福祉國家へ」、第四章「個人主義から大衆民主主義へ」、第五章「變貌する世界」、第六章「自由への道」は、それぞれ興味ある現代世界構造の分析とその社會改造理論を取扱っているが、最も特色ある第一章、第五章、第六章を中心にして現代の危機の検討對策を彼のスタイルで端的に紹介し、全體のスケッチをしてみたいと思う。

## 米

現代世界の苦惱から生れるべき「新しい世界」の問題を理解するためには、彼は先ずフランス革命を起點とする近代世界の歴史的檢討から出發しなければならぬとする。歴史意識こそ現代人の特徴である。我々は未來に横たわる道が不安と希望との明暗交錯の世界であるが故に、確實に知つた過去の道に目を向け、その中からほのかな道しるべの光りを見出してその光りによつて前途の不安を拂い除けようとする。現在我々は未來の深淵におののくが故に、過去の歴史的足場にへばりついているのである。然し未來を意識することなくして歴史はない。過去と未來との間に行動の現在が存在する。過去、現在、未來は果てなき連鎖の中に絡み合っているのである。歴史學は單に死んだ過去を對象とする死學ではなく、現在と未來のための生きた實學でなければならぬ。恰かも、哲學の古典ギリシア・ローマに於ける如く、神學の中世に於ける如く、科學の十八世紀

に於ける如く、歴史は現代に對しているといえる。歴史は現代の時代精神である。

近代史の誕生は、個別的現象の中に例示される行動原理、法則性の發見に知識への道はあるという信念の生れたのとはば時を同じくしている。この信念はデカルトの形而上學的合理主義とニュートンの科學的合理主義とに根柢をもつている。すでに十八世紀モンテスキューは「法の精神」に於いて、個別的事件も一般原則と相應し、諸國の歴史はその一般原則の結果にほかならないとしているが、十九世紀に入つて、法則性は歴史事件の中に發現するという進歩の原理が支配的となり、歴史の研究はこの法則を理解するための鍵であるとされたのである。殊にダーウィンが進化は生存競争・適者生存の過程を通じて行われることを宣明して以來、まさにこれと同じ原理、力が歴史を通じて人類前進の道程に働くとされるに至つた。いわば歴史に於ける進歩と自然世界に於ける進歩とは本質的には同じプロセスであるとされたのであつて、これは二十世紀二十年代に入つても「進歩は西洋文明の支配主動精神である」(J.B. Bury)といわれたのであつた。

然るにこの歴史に於ける進歩の原理は二十世紀三十年代に至つて急激に變化して、殆んど完全に消え去るに至つた。それは成熟したすべての文明に内在する自然崩壊過程の原理によつて代わられて了つた。夙に一九一八年シュペンゲラーは「西洋の没落」を唱えたが、今や西洋文明崩壊の時期は到來したのである。一九三四年トインビー教授は「歴史の研究」を著して進歩の原理を批判し、悲觀的な文明輪廻説を唱えたが、更に一九四九年、バスターフィールド教授

は「キリスト教と文明」に於いて進歩の原理に對する反動的論述を展開した。この過去百五十年の變化の基本的性格を尋ねることは極めて重要であつて、これによつて來るべき新しい社會の基礎が明かにされるのである。それ故に、この問題を上述三學者の所説を檢討しつつ究明することにする。

シュペンゲラーの説は最も單純である。彼は文明という歴史的有機體は運命といわれる因果の法則に従つて當然にその原因結果が定まつているとする。然しこのシュペンゲラーの所論は力強く訴へはするけれども、彼が抽象的に、文明の存在は進歩發達・凋落崩壊という確定原則に従う客觀的全體であると性急に前提した信念に缺陷がある。この前提が誤つていれば論理的に彼の説は成立しない。而もこの前提の信念は受け入れられないこと明かである。

トインビーはシュペンゲラーの如き高調的なドイツの行き方をせず、冷靜にイギリス的な經驗的傳統に従つて文明一般の流れを觀察して、文明が如何に實際に歩んで來たかを研究することによつて文明の行動原則を打ち建てようとするのである。彼は文明を歴史家がひとまとめに一括するのを便宜とした諸現象の束ねたものの別名にすぎないとする。然しこの定義は如何に妥當現實的に見えても、文明の行動原則を發見するには不十分である。トインビーは歴史を繰り返すものと見る。歴史は彼にとつては、色々の事が表面は異つた變化を見せ異つた脈絡で現れても、所詮繰り返して何回となく生起した同じ事柄から成つているのである。然しカー教授はこれに對し、歴史は繰り返すものでなく連續的「コネクトイブ」なものとする。即ち教授にとつては歴史は諸事件の行列であつてそれについて確實にいわ

れる唯一のことは、それがつねに動いて居り決して同じ場所には歸つて來ないということである。この教授とトインビーとの相違はまた歴史が教える教訓についての見解にも影響して來るのである。それはまた歴史の本質についての根本概念の相違ともなつて來る。

トインビーの見解は、シュペングラーと同じく歴史と科學との類推に立脚しているのであつて、その中に歴史理論はほぼ二世紀間絡み合つていたのである。然しこのアナロギーは誤りである。科學に於いては舞臺は何回でも同様に繰り返す、何故ならその舞臺に出來る役者は過去には無關心な生命をもたない存在であるからである。然るに歴史に於いては舞臺の役者は二度目の演出ではすでに大團圓を知つているから繰返すことはいらない。そこに於いては最初の演出の主要條件は再現しないのである。一例をあげれば、二つの世界大戦の間に、ある著名な軍事評論家は一九一四年から一八八一年に至る間の陸戦の條件を研究して、次の大戦では守勢が再び攻勢に勝つであろうと豫言した。その客觀的推論は全く完全であつたが、彼は一つの要素を看過していたのである。その點といふのは、ドイツの將軍達は二度目の演出では一九一八年の不幸な大團圓の落ちを繰返すまいと決心していたことであつた。彼等は因果の連鎖の中に新しい要素を挿入して、一九四〇年豫想されていたのと全く反對の方向をすることが出來たのであつた。過去を意識する人間は歴史が繰返すことを阻止する。科學と歴史との類推、歴史の回歸説はすべて人間が過去を意識していることを見逃している點で根本的誤謬を犯しているのである。過去に注意深く検討の目を向けることを怠つたならば、將來に對しても理論的に見通しをすることが出來ないであらう。

然しながらこれは過去には必ず一定の従うべき法則があり學ぶべき先例があるということの意味しない。過去百五十年の歴史に深い關心をもつのは、再び起りそうなことを過去の歴史の中に期待するからではなく、それは歴史が諸事件の連続した線或は行列であつて、その半分は過去にあり、その半分が未來にあるからであつて、その半分を知らなければ、他の半分は理論的に考へることは出來ないからである。

バターフィールドはシュペングラー、トインビー兩者の歴史進歩理論に對して強く反對する。それは、兩者が一方は抽象的にドイツに、他方は經驗的にイギリスに十九世紀末の形態で進歩理論を構成して、それに基本的検討を加へることなく衰退没落の理論を作成したからである。バターフィールドは十九世紀や啓蒙時代を超えて、プロテスタンティズムの攝理の歴史に我々をつれ戻すのである。それはキリスト教歴史觀というより攝理説という方がふさわしい。何故なら、今日のクリスチャンは星の運行を變へるため神をもち出したり、又近代史の流れに神の介入を信じようとはしないのに、バターフィールドは十九世紀の進歩を神の攝理に歸し、現代は歴史の審判の時代であるとするからである。彼は「歷史上最苦の天の罰は自らがただに彼等自身のみならず未來にわたつてまで攝理を行う地上の王であるかの如く主權的に支配する者の上に落ちる」といつているが、この意味ではナポレオン、ヒトラーだけでなく、國際連盟の作成者や地上に天國をつくらうと狂奔する救濟萬能藥處方者にも天罰は落ちることになるであらう。カー教授は、これに對して何故に歴史の審判はナポレオンやある重大な大罪を犯した者だけに下されて、一八一五

年から一九一四年まで同様の罪を犯した者には下されぬのかと反問する。近代的意味に於ける歴史は、恰も星の運行に神の介在をみとめる信念が天文學上容れられないのと等しく、歴史的事件の中に攝理をもちこむ信念を排除するところに始まるのである。

かくてカー教授は、トインビー、バターフィールドが觀念的に人間性の邪惡を強調して、この人間惡の故に現代没落の悲劇があると律し去ることを鋭く批判する。すべて人間のなすことには惡と同時に善が存在する。現代人が百年以前より、より邪惡、殘忍、侵略的であるとはいえない。家が焼け落ちたとき、トインビー、バターフィールド兩教授に火事の原因の調査を頼めば、彼等は科學者の如く空中に酸素がなければ火は起らないとの故を以て、空中に酸素の存在したことに原因を歸するであらう。この説明は正しく有力であつても本當の回答にはなつていない。近代の慘禍の原因を人間惡に歸することは歴史家を満足させないのである。歴史に於いては、科學に於ける客觀的データと同じ様に客觀的史實の存在を前提としなければならぬ。史實が歴史に對する關係は丁度煉瓦、鐵筋、コンクリートが建築に於けるのと同様である。それは打ち建てられテストされ實證されなければならない事實であつて、歴史家はまやかしの材料で歴史を構築してはならない。ジュースイット教徒とマルクシストは、眞の史實よりも如何なる事實が史實として重要であるかという賛否評價についての理論を問題とする。カール・ベツカーは、史實は歴史家がつくり上げてから始めて存在するといつてゐるが、事實の選擇配置、因果關係の配列は歴史家の結論と結びついた前提に規定されるのである。唯物史觀の歴史家は、他の史實と切り離し

て經濟的要因を優位とする。史實を通じて歴史の本質を明かにしようとしても、所詮史實と史觀の惡循環は免れ難いのである。結局歴史は歴史家とその書く過去の姿との相互作用の過程である。歴史は過去と現在との間の會話である。然しそれは死んだ過去と活きた現在との間に交わされるものではなく、歴史家が現在との連續性をひき出すことによつて再び蘇つた過去と現在との間の會話である。ユーリソウツドの所謂「連續性」と相互作用の過程」が問題なのである。現在に對して何の關連も意味もない獨立的な「型なし」の歴史は一體何の存在理由があらう。歴史はそれ自身歴史家が史料を織り上げて行く型であり、これが働かかけて歴史が構成されるのである。例えば、十九世紀の指導精神であつた進歩の思想、現代機構を揺り動かす没落衰退の輪廻説は、冷靜に過去を分析した結果の所産というよりは、現代の切羽詰つた羽目から生れ出たものである。思想體系もこれをつくる時代と人の特殊性格を反映している。ヘーゲルは歴史過程の絶對性をプロシヤ國家の中に、スペンサーは自由貿易競争論をウィクトリア全盛時代のイギリスの中に、シュペンングラーは西歐没落の運命を一九一八年のドイツ崩壞の中に、トインビーはその西洋文明の將來についてのペンシズムを一九三〇年代のイギリス政策の失敗の中に見出したのであつた。而もこの型は、過去に對してのみならず將來に對する歴史家の見解によつて規定されるのである。

過去と將來は時間領域の二大基本要素であつて、現在は過去と未來とから成る連續線上の無限少の動點である。歴史家の史觀を形成するのは、現在の現實というよりも未來の見通しによるのであつ

て、歴史の近代没落理論は、現在の困難に苦惱した結果からよりもこれから益々悪くなるであろうという信念から生れたのである。過去を判断する基準として未來をとることは全く正しい。歴史は歴史家自身がたえず動いている連続線上に於いて過去と未來を繋ぐものである。而も歴史から過去、未來双方について絶對的判断をひき出しうるものではない。すべて人間の判断は決定論と自由意志とのデイレンマに挟まれているが、人間は必然的に過去に回歸する因果律の鎖りに縛られていると同時に他方、ある一定時即ち現在に於いてその鎖りをたち切つて未來に變える力をもっている。それと共に人間は自ら決定し判断し得るとしても、それは過去制約下の一定限度に於いてであることも忘れてはならない。即ち過去重視の決定論にも、未來重視のユートピアニズムにも傾くべきではない。眞に健全な歴史家は過去の反動であるユートピアの空中樓閣を描くことを避けると共に、單に過去を再現するものでもない。歴史家は二重の作用即ち、現在及びその中から生れる未來の光りの中で過去を分析すると同時に、現在と未來を支配する事象に過去の光りを投ずることである。

現在我々は、いわば奔流の眞只中に棹さして居りながら、すでに離れ去つた岸邊に觀取される廢墟のあとを戀々と振り返つてゐるが、激流は我々を嫌應なしに深淵へと押し流している。我々は後に横たわる廢墟にノスタルジアをもつて執着することなく、行手に見渡される彼岸に目を向けねばならない。かくて現代の危機意識から發する彼の歴史觀は、後る向きの歴史を、前向きの歴史に變へんとするものであるといえよう。

\*

かかる新しき歴史的展望の中に、彼は現代世界の構造分析を行つてその改造再建方式を考究する。現代國際關係の基本特徴はヨーロッパの没落であり、世界指導權は大西洋を渡つて了つたことにある。然しながらここに注意すべきは、アメリカ新外交政策は、一皮めくれば十九世紀英國外交政策方式に基く勢力均衡政策にはかならず、その經濟政策の基調は十九世紀自由貿易政策であつて、そのテキスト・ブックは英國がかつて十九世紀つくり上げたものにはかならないことである。現在アメリカがナショナリスト・ドイツ、セミファシスト・イタリー、ミリタリスト・日本等反對勢力に對し、援助の支柱を與えていることは、過去に於ける英國の外交方式を踏襲するものといひうる。今日のアメリカ人は、意識すると否とに拘らず、英國指導權に代つてアメリカがこれをとれば、一世紀以前の繁榮平和の世界が再び訪れるのに、これを妨げるものがソヴェットの非安協的・侵略性であるとする。それ故にこそソ連の進出とロシア革命を極端に嫌惡するのである。然しこのアメリカ的世界觀は歴史的展望に於いて著しく缺けるところがある。今日の世界の禍惡と困難の責任をすべてロシアに歸することは極めて安易な責任回避論であることを反省しなければならぬ。

我々が現在棹さしている流れの水源をなす主流は、フランス革命、アメリカ革命、産業革命の歴史的領域にまで溯らなければならぬのであつて、ロシア革命はむしろ最近になつて合流した支流にすぎず、これが氾濫し荒れ狂つてゐる様に見えるても主流の水脈を變へる

には至らないのである。即ち、主流は滔々と流れて、たとえロシア革命がなかつたとして我々は十九世紀中葉の流れとは非常に違つた水流に棹さしているであろう。若し現在の新しいパイロットが百年前古い水先案内に役立つたと同じ海圖に従つて進路をきめようとするならば、船を山に上げるの重大な危険なしとしないのである。

然らば、二十世紀に於て世界は如何なる基本的變化を遂げたのであろうか。端的にいえば、現在我々はマルクスの所謂「永久革命」時代に生きてるのであつて、その二大潮流は社會革命と植民地革命とに要約されるのである。

社會革命の中心は、夜警國家から福祉國家への變移、即ちすべてに對し平等な分前を保證し、働く者すべてに職を興え、自由價格、自由貿易、自由放任の經濟に對して統制を加えて、失業、恐慌、獨占を回避して競争から計畫經濟へと變移する新しき國家の變容にある。然しこの社會改造は幾多の困難な問題を伴つた。殊にこの革命が最も資本主義の成熟した先進國に最初に起らず、經濟的に後進國ロシアに起つたことは不幸なことであつたが、更に不幸なことは社會革命のアメリカ的側面にある。即ち、それはアメリカ經濟の自由放任、私有企業の原則優勝は何等いむべきものではないかに見えるが、實は失業缺乏に悩むヨーロッパに痛くひびくものであることを知らねばならない。例えば再軍備問題にせよ、アメリカには再軍備は未だ遊休資材を活用し過剰生産の淀みをとめる失業救済安全瓣を意味するに反し、ヨーロッパは軍備の必要を認めるに吝かでないとしても、軍備はヨーロッパにとつて生存と社會改造のために絕對必要な資源を引き割いて社會政策を侵害しベルトを締めることを意

味する。特に英國にとつて今や勞働力は生活水準を維持するに足るだけの餘裕がないのであるから、軍事計畫と社會計畫とのバランスの問題は極めて重要、困難な課題である。

社會革命に次いで第二の主題は即ち植民地革命である。ここでも十九世紀社會の分析から始めなければならない。即ち先進工業國と後進植民國との分化は、ただに人種差別不平等のみならず經濟的不平等に基因している。一九〇二年、英國は日本と同盟を結び、その結果この日本はロシアに勝利を得たが、それこそアジアのみならず全世界の有色人種に植民地革命の熱をよび起したのである。現在、ヨーロッパの支配權及ぶあらゆるところに政治的獨立の烽火が上つて居り、ただにアジアはヨーロッパの軍事的政治的干渉を排除せんとするのみならず、アジアに戦う白人軍隊をすべて侵略と見做すに至つて居る。この白人支配、白人干渉に對するアジアの團結反對は新しく恐るべき現象である。現在ソ連はこのアジアと西歐との衝突から利益を受けてこれを高めんとしているが、ソ連とてこの流れを統制することは出来ないであらう。その根本問題は政治的であるよりも經濟的であつて、それは却て慘禍を招くというよりこれを鎮める希望を抱かせるのである。政治的獨立平等は經濟的獨立平等の裏付けがなければ解決されない。經濟的側面の解決策、即ち資本投下、技術援助、計畫國際貿易等は植民地革命を平和裡に解決させる必要條件である。

最後に第三次大戰についてアメリカとヨーロッパとの見解相違は極めて微妙である。アメリカは如何に戰爭を恐れても依然として尙次の戰爭にたえうる力をもつて居り、如何に第三次大戰に勝ちうる



かに關心をもつに反して、今日のヨーロッパは何よりも第三次大戦を如何にして避けうるかに關心をもつてゐるのである。それ故に次の大戦開始に當つてのヨーロッパの使命は、國際會議に如何に道義的主張の權利をもつかにかかつてゐる。我々はアメリカに知らしめねばならない、今日、ヨーロッパもアジアも十九世紀的秩序には復歸することは出来ないであり、過去に戻りえないが故に絶望から逃れるためには社會革命、植民地革命の目標に向つて進まねばならないのであつて、而もこの前進こそソ連の力に對する最良の防波堤であることを。

米

現在、危機は全世界を蔽い、激流は岸邊の繫留場から我々を深淵へ向つて押し流しつゝある。我々が若し破滅を免れようとするならば、それにはただひとつ未知の彼岸へ我々の船を漕ぎ進めることあるのみである。後にとり殘された廢墟のノスタルジアにひかれるならば、航海は妨げられて唯一の危機回避の活路は失われるであろう。現在我々が當面する可能性は、突如たる大災厄が、徐々な停滯衰退か、新しい歴史的時代の必要條件に適應することかの三つしかない。唯一つしてはならぬことはすでに離れ去つた岸に歸ろうとすることである。大災厄は不可抗力に我々を壓倒し去るかも知れない。然し旋風がありそうだからといって、航海を怠つたり投げたりする理由は成り立たない。我々は雄々しく前途に立ち向うことによつてのみ危機を乗り切るチャンスをもつのである。この危機脱出の道、自由への道は、創造的活動の機會であつて、それは過去を未來

の出發點としてもちながら、而も過去を振り切つて死者の支配から世界を救い出さんと努めるところに開ける。彼は、死體解剖の時が來たとき左派ですらその胸に「安全第一」のモットーをきざんで死んだことを知られるより、右派すら革命を肯定したその母國を可とすると力説して、未來に向つて前進を強く要請するのである。(一九五三・三・二〇)

(内山正徳)

Alfred Verdross:

## Völkerrecht

Zweite völlig umgearbeitete und erweiterte

Ausgabe, ss xviii, 508.

フェアドロス著『國際法』(二版)

この世紀の初めの頃、若きオーストリー學派をケルゼンなどと共に創設し、國際法の分野に純粹法學の方法論を導入して國際法優位の原則を理論的に確立した著者、アルフレッド・フェアドロスが、畢生の勞作として世に送つた本書新版は、學術の、音樂の、そして平和の都、ウィーンにある大學に、今なお唯獨り留まつて教鞭をとる、戦争の敗北と占領管理の經濟的困窮と精神的貧困のうちに、再建されつつあるドイツ及びオーストリー國際法學の LEITSTERN の榮譽が捧げられよう。すでに國際法の論究において、國家主權と